【50用　語】

【三河万歳：みかわまんざい】三河地方を中心に、初春に太夫と才蔵が二人一組で家々を回り、祝い言を述べる芸能

【大小絵：だいしょうえ】陰暦を用いた頃、大小の月を色々な趣好を用いて描いた簡単な印刷物

【申納：もうしおさむ】申し上げ終える、年始の祝詞を言う。申し入れる

【越年：えつねん】「おつねん」とも読む。新年を迎えること

【恐悦：きょうえつ】かしこまり喜ぶこと、うれしい限り

【恐惶謹言：きょうこうきんげん】書状の末尾に付けて敬意を表す慣用句

【百姓宿：ひゃくしょうやど】「公事宿・郷宿」に同じ。訴訟のため地方から出てきた公事人を宿泊させた宿屋

【猶々：なおなお】ますます、一段と、書簡文の追而書（おってがき）に用い、さらに、加えての意

【出府：しゅっぷ】訴願や年貢上納などのために江戸に出ること

【贔屓：ひいき】目をかけて世話すること、商店などを好意をもって特に利用すること

【最寄：もより】近隣、付近、近辺

【風聴：ふうちょう】「吹聴」（ふいちょう）とも。宣伝、披露、言いふらすこと、噂

【推挙：すいきょ】地位などが上がるように取り持つこと、推薦

【50解　説】

江戸の神田小柳町にある百姓宿（公事宿：くじやど）伊勢屋伝次郎が文久四年（元治元年・一八六四）正月、関東周辺のお得意様に送った木版刷りの新年の挨拶状である。公事宿は郷宿（ごうやど）ともいい、訴訟や裁判のために地方から江戸へ出てきた訴願人らを宿泊させた宿のことである。宿側では謝礼を得て江戸市中の案内、訴訟手続きの代行、諸書類の送達、金銭の融通なども行っていた。

一方、色刷りの挿絵は三河万歳が描かれている。三河万歳とは、愛知県の三河地方（西尾・安城市）を出身地とし、初春に太夫（右、扇で舞う人）と才蔵（左、鼓を打つ人）が二人一組で家々を廻り、祝い言などを述べる祝福芸のことである。万歳師は毎年十二月下旬に江戸へ出て、正月に江戸の大名屋敷などを廻ったあと、関東周辺（常陸・下野・武蔵・上野国など）の檀那場を巡回して祝い言を述べ、お初穂料を受け取っていた。なお、絵の中にはその年の大（三十日）の月（三・五・七・八・九・十一月）と小（二十九日）の月（正・二・四・六・十・十二月）が共に書き込まれている。ぜひ探してみてください。